今日の一日がくれてしまつた落葉はきよせてゐる　岡本流一
鏡臺までとどく陽にちよつと坐つてゐるのが二日　富永谷衣
稻架に働く男とまだ風の吹く庭の柿の木　古川紅雲
畑も一隣りがあつて元日　中西國友
砂から舟をおろした初漁の焚火による　福本逸子
一日一日寒うなる蠅のとべてとんでゐる　加藤黛杉子
父の墓にも參つて母とかへる雪のある道とにかく正月　入江功一
冬木の雨に灯して暮れぎはの療舍の間隔　大山冬石
嘘だらけの世の中にさむざむと病んでゐるのがほんたう　辻村追鳥子
蕭々と雨の海で働いてをる一艘の舟ではある　廣田不知火
梅の咲いたことなども久しぶりの三人のお膳　齋藤第九人
一八の花、このごろ起きられる病人として　吉田青
飲めばほろ苦くつて散藥霜のやうな
段々畑の橙の金色の其上の空
雲も行くに日かげろひわれ枯野原を行く
音があかるい月夜のつよい風が松の木
月が冬になる木の湖にうつつてゐる
冬日の林の明るい四十雀來てゐる
空つ風吹いて吹いて風いだ桐の實
ふきのたうみみくそをとつてゐる
缺けた月がやけあと荷車のうしろからついてくる犬
火があかあかと兄弟ばかりの冬になる
まだ明るい山が冬の山へかへつてゆく
並木はいてふの細い月が光を增す頃の落葉
子供に燒けてからのからす瓜實になつてゐる

給事情を御心配になるのは當然の御事なのだから、其事を大さう珍らしい事のやうに大々的に書き立てるのは、却て逆効果を生ずるのではないかといふのである。獨り此日の「毎日」は一段で小さく扱つた。――「天皇陛下には六日、午後二時副島農相に拜謁仰せ付けられ……國民生活に就て御下問、農相は恐懼感激して奉答、同四十五分退下した」。だが、農相が恒例に依つて恐懼感激したといふ印象を與へる。寧ろ「恐懼感激」を削つて「――御下問あらせられた」とする方が、文句が短くなるとは反對に、餘情は却て深くなり、國民としては陛下に御心配をかけては濟まぬと恐懼するやうになる。――といふ日本新聞報記者の云ふところは正しい。文句を多くして（それが常套的である場合は猶更の事）却て逆効果を生ずることは、俳句の表現に於ても同じことである。

（二月二十日）

×

十九、二十日の兩日、陛下は東京及び神奈川縣下の戰災地を巡察あそばされた。新聞で見ると、背廣にオーバアの通常の御服裝で、護衛なども至つて少く、工場の内部へおはいりになつて工員達にも親しく御言

敗戰の年暮るる雪から掘り出してゐる　栗田白夢
多夜の山までかかるくて木の股の雪　山川白朝
餅つく音があられ　水野田々詩
父と子と山を畑にしようとしてゐる　瀬戸照子
雀屋根の上で機嫌よく朝から多が晴れてゐる　五十嵐みい
みかんならせたままの藁家の雨があかるい二ン月　品川幸一郎
寒くなる南天が赤くなるけふ雨ふり　小林秀洋
師走の川は大根白うそして流るる　白石獸忍濤
それから便りがない話の焚火が燃える　坂田義三
爐火にて米煎る匂ひの今晩雪靜かな　山鹿玲瓏子
川からあげた川魚で花びらをたべてゐるかな　關根不佐子
月夜の落葉する音ををんながねむつてからの机にする　水田潤
春のくる陽ざし黑板に文字大きく書く　栗田千可志
何はなくとも正月のもちごめ水につけて寒あたたかし
空のすみきつた燒けあと芽をもつ
阿蘇がくつきりと梅もどき
家並が橋になつて遲月が多
カナリヤ籠に秋日さして鍼灸治療所午後はひま
牛が反芻してゐて雨の日子供は讀んでゐる
橋があるとそこはもう多の海で家がほつと灯り
思ふぞんぶん働けるこの頃窓の葉が散るのです
あんよひとりでする、靴の少し大きいことも日なたおちば
埋火いけて雨が止めば星が出る
お宮は杉の木立雨ふればぬれて春のちかく
月が雪原を照り寒ンもまだなかば

葉をかけられたと云ふ。これは、大さう、ありがたいことである。――といふよりも、大さう朗かなことである。日本明るくなる、といふ氣持である。恐らくは、陛下御自身に於ても、在來のやうに、巡査の襖の中をいときうくつに運びたまうた頃とは違つて、大さう朗かな御氣持になられたことであらうと拜察する。（二月廿一日）

×

今日の「毎日」の建設欄に一中學生の投書らしく、次のやうなことが出てゐた。陛下が東京都立一中に行幸の際、其前日、中學では生徒を動員して、はめ板のすきまのゴミまでほじくり出させた。これでも教育民主主義化であるか、といふのだ。一體、高貴な方の御巡察といふと、極端に神經を使ふのが從來の惡い癖で、戰災地を御視察といふのに、その所だけすつかり奇麗に片付けて御覽に入れるのは、却て御視察の御心持にも背くものだと思ふ。だが、中學校に御成りといふのに、掃除をする必要もないといふのは無茶なことで、かういふ風に民主主義の履き違ひがあるのには困る。普通の家だとて、めづらしいお客がある時には便所から好く掃除をしておくのが禮儀でも

ひるはあたたかい雪の雫の善光寺山門　山根志乃竹

雪になりさうな雜木山の路が見えてゐる　鈴木單衣女

降りさうで又日のさして杉垣の杉のはな　東信太郎

冬は湯の匂ひに指の化粧する　高橋政二

鵜の來てゐて畑は枯木とその一軒　和田靈南

水をくんで薪も割つて一服の莫とする春の雲　氏家芳州

寒い膝頭の兩の手　霜山桑風

晴れると山から虹がたつ隣と軒が一つで雫す　淺野智秋

手引いてゆく子があつてゆくいつも月のそばにある星　北田茶木彦

燒跡のここらも早春の月影でバラックの二つ三つは　河崎平一郎

燒跡今日も雨のこれからの日本これからの多　朝霧北岡

ひよつとしたらの寶籤の一枚茶の花見てゐる　山口國俊

畑から陽が上り道の家陽がさし元日人の見えて通る

山には池が凍つてゐる山に來て

女肩掛けしてゆく梅の花かな

白い障子のくつきり松の葉影が大つもごりとか

うつすら夕闇の溫みは雨はれた八ッ手の葉

子供たちならんでゆく麥の芽霜のとける

學校の窓がうたつてゐる日々麥の青みゆく

子供は朗か米兵は大またで街は十一月三日の旗

ふるさと復員してお畫のサイレンをきいてゐる秋

雪がふればぶりしきる村はづれのからまつ林も

木の根元に何かあると鴉が寄り合つてゐる、多

ねむられずせせらぎの外は月夜かう

ら山ずつと畠にして雪もある枯木

あり、又、人情の美しさでもある。まして、學校としては、それが學校としての禮儀であり、生徒としては、其を喜んでする氣持がありたいものだ。そんな生徒も戰爭中には一言の不平も云ひ得なかつたのではないか。今更、にはかに民主主義を自己的に解釋するのは困つたものである。

×

いかにも春だといふやうな暖い日だ。いつも鶴岡八幡宮の橋の前に出てゐる山雀の藝の前に進駐兵が立つて見てゐる。のぞいて見ると、山雀の籠の前には Fortune teller bird と書いて、其下に this bird will tell you your fortune（此の鳥は運勢を占うてあげます）と。見料は one yen だ。一人が金を渡すと、山雀のをぢさん、英語で山雀に命令する。――「ベル」、「ドア」、「テイケット」さう命ずると、山雀は鈴を振り、扉を開き、おみくじをくはへて來る。おゝ、山雀がいつ英語をおぼえたのかと驚く。「ワン……ツウ……スリ……」、山雀はおみくじを其回數だけくはへかへす。おぢさんは「オーケー」と云つて、山雀からおみくじを受取つて、進駐兵にわたす。「サンキュー」、これで「一圓」である。時節がらの、

雪の上の蜜柑の皮なら寒の雨降り
かまきり日なたのほしいもの日のうつり
秋めけば朝月のあさは草のしろう咲き
ひとりはよろしからまつちるのをみる
あるがままの姿日本の國の稻はうれ
みかん畑みづうみの波がしづかな
寄合があるので蜜柑山月の出るを出て行く
復員の君に敗戰の火燵のあたたかいばかり
下駄たててゐる麥の芽
私は出たり出なかつたり娘は通勤になつて蜜柑の皮
吾より小さくなりほほえむ母あはれ
高い棕櫚の木一本である空である
散りつくしてからす
山はもみぢの雨に番傘さしてゆく
雨止んで月の木も草も碧い月夜よ
嚴に石蕗咲き多濤しぶきかかり咲き
今夜靜かめいめいの太ばしの袋をつくり名前を書き
南天のあかさや一むらの竹や多の日
留守居して鴉が多枯れの柿の木のてつぺん
めんこ打つ子供と蜻蛉、アメリカ兵がぢつと見てゐる
薪小舍の牙のやうなつらら日が昇る
このとしの大寒の入りの暖きを金柑の一鉢
ヒマの實摘まるることもせず木枯吹く
歩いた道が船からも見えてそのやうな紅葉
星と雲あしの早い月の、こんやよくない（宿病）

高橋松二
竹内孤明
酒井健之
渡部伊津三
桐井葦彦
杉浦經子
星野あきら
入重田保朗
横瀨碧山子
東草二郎
阿部陸吉
秋山義生
谷口晃男
小野寺大葉子
飯田三茶
加藤白水境
丹屋忠治
林昭一
片桐光成
寺田眞紀子
中原紫保子
長谷川善一
並木綠朗
森景諫郎
折居遙子

うまい商賣である。以前、此の前を通つて
むかしながらの山雀の藝
といふ言葉がふつと口に出てきて、これは連句の付句になるな、と考へたこともあつだが……

横文字の土產店など長閑なり
（二月廿二日）

×

そばがきの會。近くの丸山良策氏方にて數名集る。中支戰線に從軍した朝日新聞記者M氏の談に――或る部隊長は野獸的だとする、戰果をあげるのは必ず後者である、と。蓋し、戰爭そのものがザンギヤクなのだから、戰陣に於て道德を說いても爲方がない、戰爭そのものをやめる他はない。從來、安易に口にされてゐた「正義の戰」といふやうな言葉は果して實際に存立し得るかとさへ疑はれる。M氏又談す――南京に攻め入つた時、商舗は掠奪にさらされた。或文具店にちん入した兵隊は、いきなり萬年筆を取り集めて、銃の臺尻でめた打に碎いた。たゞ金ペンを取る爲なのだ、と。かういふ談は、聞くだけでも心が暗くなる。日本國內の文化が戰爭中、いかにむちやくちやに破

ふるゆき（特選）

平松星童

かはばたやなぎ、ひかりは人力車のくるまのまはるあかるい淋しさ
思ひ出したやうに葉が散るのでとまつてゐる人力車のかたち
少年少女をのせてゆく銀輪の夕映えどこまでも
ゆふやけがあをざめてゆくをランプのほやの金色のゆめ
ふるゆきがつもるゆきとなつてふるオルガン
窓にゆきの、その窓に星のオルガンのふた
ひよこにちよいととさかがはえましてふゆなのはたけ
ぷと日がてるときのさびしさはちやわんぎちぎちあらつてゐる母
霧の中白いますくの少女のいちづな目にあつたり野菊が咲いてゐたり
れつれつとふるゆきのあはあはとふるゆきとなつて、つもる
冬が壁の月になる

こんな世の中（特選）

飯尾青城子

陽ざしみな底の石をまで、正月汽車でとほる
雪よりも白い一羽となつて雪晴れたそら
蕗のたうが出ましたよおばさん此うちの古い時計がボンボンボン
みぞるるとてももう春の季節の竹ン中の徑
なんと斯んな世の中となつて戀猫とたん屋根ぺこんぺこんとほる
鴉のいそぐ夕空の下戰災孤兒といふのです
裏門から春の海、隱岐の島を見せるなど
隱岐の見える砂丘も旅でつくしんぼう手にして
ここから大山とてもまだ白し彼岸君の墓（線石の墓）
和尚も鐘も召されとる鐘撞堂であるつくつくぼうし

社中より

井泉水

◆層雲の復活第一號がやうやく春光の中に生れ出たことは、諸君に喜んでいたゞきたい。實は、終戰後、出版言論が全く自由なる世の中となつた上は、一日も早く、層雲を復活させたかつたものゝ、都下の印刷所は大抵燒けてしまひ、又、印刷用紙が著しく拂底であつて、印刷出版の實際は、戰爭中よりも却つて不自由の有樣となつた。さうした事情を克復して、とにもかくにも爰に、復活第一號を麗日の下に送り出したのである。

◆「國破れて山河あり城春にして草木深し」とは杜甫の有名な詩句であり、奥の細道にも引用されてゐるが、今日の日本はまつたく此の感が深い。國體擁護の聲はあるが、嘗て金おう無缺と信ぜられたる國體は毀たれ、日本の誇りと考へられてゐた道義は廢れ、日日の生活さへ不自由の中に、依然として美しきものは日本　山であり、川である。敗れたりと雖も、春になれば咲く花、唱ふ鳥である。都邑は一面の燒土と化し、

ひとりごと

井泉水

昭和十九年六月層雲が終刊號（第三十三卷四月號）を出した時に、私は『最後のページ』にといふ一文を書いた。諸君は好く知つてゐられる如く、其時は、「層雲」と「海紅」其他一誌が併合して、「俳句日本」といふ新しい雜誌が出來たのだつた。「層雲」といふ名の消去ることは淋しいけれども、或意味に於ては、これも好いことと思ふと書いた。といふのは、自由律俳句といふものが發生してから、層雲と海紅と二つの流れに分れてゐる。層雲は海紅を顧みず、海紅は層雲にソッポを向けてゐる、だが同じく自由律の道を行くものとして、其間に相互の理解をすゝめて、他の長を執つて己れの短を補ふことをするのは好い事ではないか。此事は私として以前から考へてゐたのだが、其を橋渡しする機會がなかつた。此事が官憲の統制といふ好ましからぬ手段に依つて爲されたにしても、其結果に於て、一つの新しい廣い流を構成するものとなるならば、却て大に朗かなことではないかと思つたのである。も一つ、俳句の定型陣に對する、自由律陣は俳壇的に見れば甚だ少數であり微力である。その少數者の中に又幾派かゞ岐れてゐることは、各自の信ずる上から當然であるとしても、此道を宣揚する上から見れば弱體たることを免れないのだから、自由律相携へて定型陣に對して一個の共同戰線を作ることが必要ではないか。さういふ機運を促進するものとして、合同風の機關誌が出來ることは大に結構ではないかと思つたのである。これは、負け惜しみで云つたのではなく、ジェスチュアとして云つたのでもなく、其時、私は心から、さう感じてゐたのである。

ところが、「俳句日本」として出立して一二號を出すうちに、此の私の希望は、その實現がむづかしいことだと思はれて來、はては到底駄目だと感ぜられて來た。私は大さう淋しい氣がしたのである。

私は最初、「俳句日本」として發行する以上は層雲派だとか、海紅派だとかいふ派的色彩を少くし、即ち同人雜誌的の空氣を出來るだけ拂拭して、「自由律俳句」の「俳句研究」といふ風な、對世間的な風格をもつ雜誌としたいと思つた。私は出來るだけ多く、對世間的の言論や文章を書かうと思つた。選句はかなり嚴格にして、對世間的に讀ませるものを載せたいと思つた。新人にして眞に推薦に値する作品は、特選風に發表するといふ風にしたいとも思つた。ところが、「俳句日本」の編輯會議に、私は俊二君に出てもらつたが、歸つて聽くところに依ると、私の文章は長すぎて困る、層雲がさう出しやばつてくれては困るといふのださうである。新人推薦なども、層雲が一人十句も出すと、層雲だけ振つてゐるやうに見えて面白くないからやめて欲しいといふのださうである。又、自分の方は同人格といふものの顏がきまつてゐるから、此の顏を立てた編輯法をした

い、と云はれる。すると、層雲としても其の釣り合上、同人格の人を作つて並べなければ、體裁がとれないといふことになる。句數も各派不公平がないやうに、一人五句を限度としようと云はれる。藝術的に考へれば、悪平等であつて、甚だ面白くないけれども、各派對等といふ概念に立脚するならば、さうするより他はないといふことになる。こんな風にして、自派としての體面を保つといふことに力點がおかれる有樣であるから、藝術的の理解などを進めることは、木に依つて魚を求めるやうなことだと考へさせられたのである。

それは兎に角として、俳句日本といふものは發行の上からは順調に毎月發行された。層雲の誌友からは、種々の評判を聞いた。その通ずる聲としては、さわがしくて面白くない、又不純で面白くないといふことだつた。所謂、さわがしいといふ感じは、黨派的にせり合つてゐる意識が何處となく誌面に漂つてゐるといふことだらうと思ふ。それをこそ、私は克服したいと念じてゐたのだが、それは藝術の問題ではなくて、感情の問題なのだから、どうにも出來ぬことだといふ事が解つたのである。又、不純で面白くないといふ評には、俳句雜誌の誌友といふものは層雲なら層雲といふサアクルに興味をもち、海紅ならば海紅といふサアクルに興味を集中してゐるのであつて、他のサアクルには全く關心をもつてゐないといふ事實を語つてゐるものと思ふ。だから、層雲の人は純正なる層雲を望み、他のものが混入してゐるのは、以て不純なりとする、海紅に於ても同じであらう。かういふ心持が動かすべからざるものとすれば、他派に對してお互に理解をし合ふことの出來ないのは勿論のこと、定型陣に對して共同戰線を作るなど云ふことは、當分政界で問題になつてゐる人民戰線の結成などよりもずつと困難だといふことが解つたのである。

「俳句日本」の成立に際して、私が希望をかけ、又、一つの理念としたことは、要するに空中樓閣の如きものだつたのである。だが、然し、私は一つの希望として、又一つの理念として、さきのアイデアを今もつて捨ててはゐない。層雲には層雲の道があり、海紅には海紅の道があるけれども、それを綜合する自由律の國といふものはある。おの〳〵が自分の道あることのみを知つて、他に國のあることを知らぬならば、しぜんと鎖國的になり、獨善的になる危險無しとしない。一面、縱に己れの道に深く心をひそめると共に、他面、横に廣く目を放つて展望するといふ心がなければならない。俳句人といふものは、もつと〳〵「雅量」といふものを持たなくてはならない。「虛心」といふ心構へをもたなくてはならない。俳句人は俳句作者として立つよりも先づ以て感情的でない素直な人間、排他的でない大らかな人間となる修養をなすべきである。殊に當今の自由律俳句人は、句を作る、といふことばかりに血道をあげて、自らを小さく〳〵コチ〳〵にしてゐる弊があるのではないかと思ふ。

根本のことを云へば、此の「人間を作る」といふ事の方が、「俳句を作る」といふ事よりも重大である。いかに上手らしい句を作つても下劣な人間であつては致し方無い。先づ「まこと」の人間となつて佳き句が生れる。「まこと」の句を練ることに依つて好き人間にならうといふことが自由律の道である。

私はまア、長い目で見てゐたい。將來、自由律俳句全體の心境が向上し高度化するならば、必ずや私のアイデアが實現されてゆく、さういふ時期が來るに違ひないと思ふ。「俳句日本」といふ雜誌の名題は、さういふ時期の來るまで、ソッとしまつて置いても好いのではないかとも思つてゐる。

——一九四六年二月十一日——

壁書

句材は一草一木の眞實を觀取すべし
句體は一作一律の自在を志向すべし
句會は一期一會の隨緣を享受すべし
句境は一生一路の信念を護持すべし

井泉水

層雲社中

目次

文章

・層雲……1
・再建最初の頁に……2
・鎌倉雜記……7
・心に太陽を……25
・田鼠や鷹や……26
・社中より……35
・ひとりごと……37
・壁書……39

俳句

・春雪旅情　井泉水 7
・こんな世の中　青城子 35
・ふるゆき　星童 35
・かれあし　鉉十郎 36
・島の駐在さん　井夢 36
・麗日壇　井泉水選 7
・明日壇　井泉水選 37

（表紙　鈴木信太郎）

投稿略規

・投稿は誰でも自由
・俳句は一人一月一稿
・句數は一般は十句迄
・句稿の添刪を望む方は別項内規に依る
・用紙は半紙二ツ切大のもの一枚に五句迄、楷書淸記、二枚以上は左上カドを綴る
・締切は毎月十五日
・投稿先　層雲社編輯部

層雲　第三九七號
昭和二十一年五月二十五日印刷
昭和二十一年六月一日發行
編輯兼發行人　萩原藤吉
印刷人　末正久左衞門
印刷所　東京都神田區鎌倉町四　興國印刷株式會社
發行所　神奈川縣大船町山之内一五三四　層雲社　振替東京八〇二三番
配給元　東京都神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社
定價金三圓（送料十錢）

層雲

第三十四卷　第一號

（明治四十四年四月二十七日第三種郵便物認可）
（昭和二十一年六月一日發行）

昭和二十一年五月二十五日印刷納本

定價三圓